

## 広島大学附属東雲中学校の授業研究（平成28年度）

### ― 授業デザイン提案型の授業研究を通して ―

広島大学附属東雲中学校研究部

天野 秀樹 ・ 龍岡 寛幸  
鈴木 悦子 ・ 藤井 朋子  
西 勉

#### 1. 授業デザイン提案型の授業研究の方向性

広島大学附属東雲中学校（以下、本校と略記）では、本年度の授業研究を、授業デザインの視点を提案することを成果物として出す研究とした。

そこで本節では、まず、授業研究の目的が授業デザインの視点の提案であることを述べる。次に本校では、授業を主体性、協働性、多様性から捉える3つの視点を設定していることを述べる。

なお、本稿であげる「授業デザイン」の理念は、授業のplan-do-seeの中で、子ども一人ひとりの学びのストーリーを編み上げたシナリオ作り（秋田・佐藤，2006）である。このような理念をふまえたうえで、本校が捉える「授業デザイン」は、「子ども一人ひとりの学びを考えて授業を設計・実行・反省する中で、さらに授業を創りあげる一連の活動」としている。その際に授業を創りあげる方法は、デザイン研究の手法を用いる。これは、まず、理想とする学習を考え、実践することで学習仮説を立てる。次に、その学習仮説をもとに、さらに実践をくり返して新たな学習仮説を立てる方法である（益川，2012）。

##### 1-1. 授業デザイン提案型の授業研究の目的

昨年度の研究を通して本校では、協働的問題解決を実現する授業デザインの視点の存在を明らかにしてきた。単元や領域、教科が異なっても協働的問題解決を実現するために同じ授業デザインの視点を適用できる場合があれば、同じ単元内でも、全く異なる授業デザインの視点が必要な場合もあることが見えてきた。そこで、今年度における授業研究の目的を、協働的問題解決を実現する授業デザインの視点を提案することとした。なお、本稿ではこのことを、授業デザイン提案型の授業研究と呼ぶ。

##### 1-2. 授業を捉える視点

本校では、5つの先行研究〔DeSeCo（ライチェン，サルガニク，2006），国際教育推進検討会（初等中等教育における国際教育推進検討会，2005），ATC21S（グリフィン，マクゴー，ケア，2014），グローバル人材育成推進会議（グローバル人材育成推進会議，2012），国立教育政策研究所（国立教育政策研究所，2016）〕や3つの先進校への学校視察〔東京学芸大学附属国際中等教育学校（平成27年1月，28年6月に視察），神戸大学附属中等教育学校（平成27年3月に視察），広島大学附属小学校（平成27年，28年2月の研究会に参加）〕によって得られた知見，そして、本校職員による校内授業研修会における対話の内容から、学習時における子どもの主体性、協働性、多様性の視点を設定した。そして、これらの視点に関連した意思決定力、多元的価値観を受容する力、表現・コミュニケーション力の3つの力の総体として、中学校卒業時にめざす子ども像を、共生社会をたくましく生き抜く人間力豊かな子どもと掲げている。

協働的問題解決を実現している授業では、子どもの主体性、協働性、多様性が多く表出されている。したがって、日々の授業を、子どもの主体性、協働性、多様性の3つの視点から捉えることにした。

#### 2. 授業デザイン提案型の授業研究の方法

本節では、まず、本校の授業研究が、授業デザインの視点の抽出を中心に計画していることを述べる。次に、本校における授業デザイン提案型の授業研究は、授業そのものを対象として、本時の目標に迫る要因を複数特定するチーム研究であることを述べる。

## 2-1. 年間の研究活動計画

授業研究は、各交流授業から協働的問題解決を実現する授業デザインの視点を取りあげ、それらを積み重ねていくことを主な活動とした。年間の研究活動計画を、次の図1に示す。

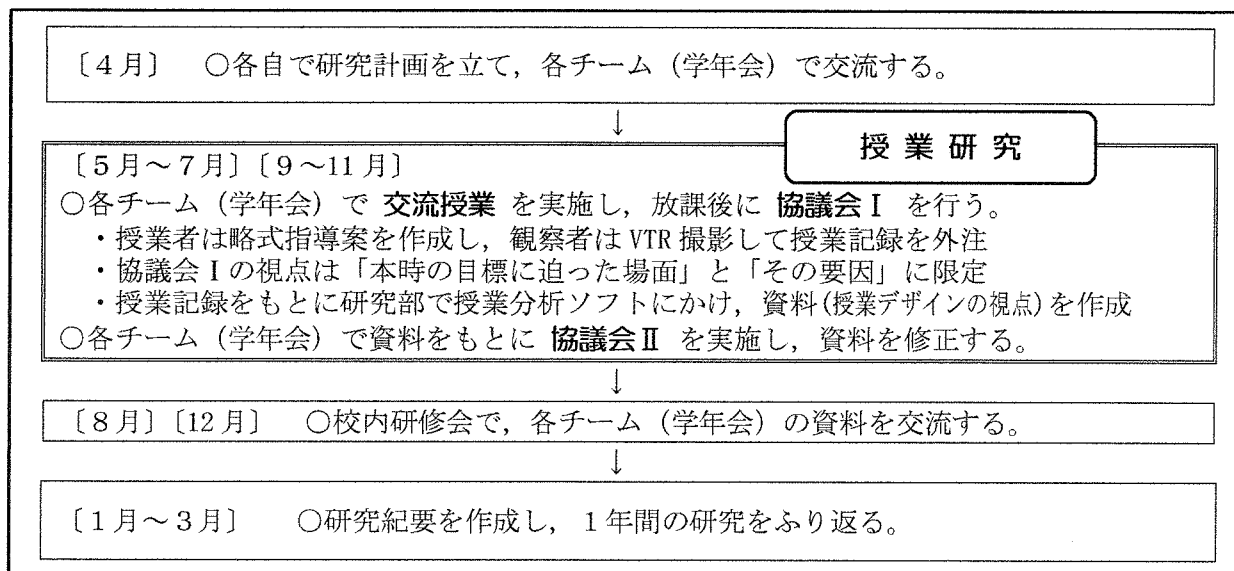


図1 年間の研究活動計画

図1に表したように、各チーム（学年会）の交流授業と協議会I、協議会IIを中心に実施している。授業デザインの視点を抽出することに焦点をあてた年間計画である。

## 2-2. 授業デザイン提案型の授業研究の特徴

この授業研究は、授業デザインの視点を取りあげるなど様々な特徴を有している。次に、授業研究の特徴を、3つにわけて述べる。

### (1) 授業そのものに焦点をあてた事例研究である

研究の対象を授業そのものに焦点を絞っている。意図して実践した授業において、子どもが見せた姿を分析する。また、その一連の活動を通して、教師が獲得した授業観や手立てについても研究の対象にする。したがって、研究の成否は、学力検査やアンケート調査などをもとに考察するのではない。実際の授業で現れた子どもの様相をもとに、次に実践する授業に活用できる手立てを導き出せたか、また、それらの検討を重ねる過程で、われわれ教師が授業を捉える視点を成長させることができたかを考察する。

### (2) 授業デザインの視点を取りあげる質的チーム研究である

最終的にグローバル時代をきりひらく資質・能力の育成を見据えて（広島大学附属東雲小学校・東雲中学校, 2015）、実際の授業から協働的問題解決を実現する授業デザインの視点を取りあげようとしている（国立教育政策研究所, 2016）。そこで、観察した授業を起こしたり、授業分析ソフト（グリフィンほか, 2014）にかけたりするなど、教師が実際の授業を捉えた視点をエビデンスとともに提示できるように質的研究法を用いている（関口, 2013）。また、教師相互で協働して授業を捉える視点を成長させられるようにするために、教科混合の小グループ―チームで研究を進めている。

### (3) 本時の目標に迫る要因を複数特定する研究である

実際の授業における本時の目標に迫った場面とその要因を複数選定しようとしている。例えば、グループ学習を設定したときに、その設定自体に効果があったとは必ずしも言えない。グループ学習を設定する前段階での教師の発問が影響していたり、グループで話し合いをしている途中段階での1人の子どもの発言が影響していたり、その要因は場面ごと、グループごとに様々である。そこで、それらの場面やグループで実際に起こっている事象に目を向け、その要因を考察する。これらの研究の意義は、他の実際に起こっている授業を捉える指標になり得るところに、有用性と提案性がある。

天野秀樹・龍岡寛幸・鈴木悦子・藤井朋子・西勉(2017),「広島大学附属東雲中学校の授業研究(平成28年度)―授業デザイン提案型の授業研究を通して―」, 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育第48集」, 9-11.

### 3. おわりに

本稿では広島大学附属東雲中学校で取り組んできた授業デザイン提案型の授業研究の概要を示した。この授業研究は、次の3つの特徴がある。

- (1) 授業そのものに焦点をあてた事例研究である。
- (2) 授業デザインの視点を取りあげる質的チーム研究である。
- (3) 本時の目標に迫る要因を複数特定する研究である。

今後は、授業デザイン提案型の授業研究が、各々の教員に及ぼす影響について検討していきたい。

#### 【引用・参考文献】

- ライチェン, サルガニク (2006), キー・コンピテンシー―国際標準の学力をめざして―, 明石書店.
- 初等中等教育における国際教育推進検討会 (2005), 国際社会を生きる人材を育成するために.
- グリフィン, マクゴー, ケア (2014), 21世紀型スキル―学びと評価の新たなカタチ―, 北大路書房.
- グローバル人材育成推進会議 (2012), グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ).
- 国立教育政策研究所 (2016), 国研ライブラリー 資質・能力 [理論編], 東洋館出版社.
- 秋田喜代美, 佐藤学 (2006), 新しい時代の教職入門, 有斐閣アルマ.
- 益川弘如 (2012), デザイン研究・デザイン実験の方法, 清水康敬他編著, 教育工学研究の方法, 177-198, ミネルヴァ書房.
- 広島大学附属東雲小学校・中学校 (2015), グローバル時代をきりひらく資質・能力を培う教育の創造―協働的問題解決ができる子どもの育成をめざして―, 東雲教育研究会実施要項.
- 関口靖広 (2013), 教育研究のための質的研究法講座, 北大路書房.